

「経験主義、意味論、存在論」におけるカルナップの議論をクワインの批判から擁護する

片山 光弥

東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻博士課程

哲学者ルドルフ・カルナップは 20 世紀の哲学史において次のように位置づけられることが少なくない。カルナップは論理実証主義の主要な論客であり、分析哲学の初期の歴史において重要な役割を果たしたものの、その主要なテーゼの多くが決定的な批判を受け、現代では歴史的な文脈を除いて顧みられることが少ない。特にクワインの「経験主義のふたつのドグマ」(Quine, W. V. O. "Two Dogmas of Empiricism," *The Philosophical Review* 60, 1951, pp. 20-24. 以下「ふたつのドグマ」と略記)における批判はカルナップの立場にとって致命的であり、カルナップの哲学はその中心的な部分に関して論駁された。

カルナップをこのように否定的に評価することは従来の哲学史においては標準的だったが、近年になってカルナップは、特にメタ形而上学における現代的議論の観点から再評価を受けている。たとえば、トマソンは『存在論を簡単にする』(Thomasson, A. L. *Ontology Made Easy*, Oxford University Press, 2015)において、カルナップの議論から大きな影響を受けつつ、カルナップに関する歴史的研究に基づいて、自身のメタ形而上学的議論を展開している。

こうしたカルナップ再評価の文脈においてとりわけ注目されることが多いのは、彼が 1950 年に発表した論文、「経験主義、意味論、存在論」(Carnap, R. "Empiricism, Semantics, and Ontology," *Revue Internationale de Philosophie* 4, 1950, pp. 20-40. 以下 "ESO" と略記)だ。この論文で彼は「～は存在するか」という形而上学の問題はどのように理解されるべきかということについて、(既存の形而上学を批判しつつ)独自のメタ形而上学的議論を行っている。ESO におけるカルナップの議論は、ともすれば不毛な論争を招きかねない存在の問題(「～は存在するか」という種類の問い)を有用な仕方解釈するためのアプローチを提示する、魅力的なものである。

しかし他方で、ESO のカルナップに関しても、従来の否定的評価は当て嵌まるのではないかという疑念がある。というのも、クワインは論文「存在論に関するカルナップの見解について」(Quine, W. V. O. "On Carnap's Views on Ontology," *Philosophical Studies* 2, 1951, pp. 65-72. 以下「カルナップの見解」と略記)において ESO のカルナップの議論を批判しており、さらに、この批判は「ふたつのドグマ」と同様の観点からなされているように思われるからだ。本発表の目標は、この「カルナップの見解」におけるクワインのカルナップ批判からカルナップを擁護することである。

ESO においてカルナップは、存在をめぐる問いに関する内的／外的 (internal/external) という区別を導入しており、「カルナップの見解」でのクワインの批判はこの区別に向けられている。カルナップによれば、存在に関する内的な問いとは、一

定の言語的枠組の内部で発される問いであり、外的な問いとは、言語的枠組の外から、その枠組において語られる存在者のそもそもの存在を問うものである。たとえば、「100以上の素数は存在するか」というのは、数に関する言語的枠組の内部で発される内的な問いであり、「数はそもそも存在するか」というのは、そうした枠組において前提されている存在者がそもそも存在するかを問う外的な問いである。カルナップの考えでは、前者の種類の問題に対しては演繹的な推論や経験的な探求によって答えを与えることができるが、後者の種類の問題は、たとえば「数」といった語はこうした問いにおいて数に関する言語的枠組における語の使用規則を顧みずに用いられているため、答えを与えることができない。

こうした内的／外的の区別に対するクワインの批判の趣旨は次のようなものだ。たとえば、数にも物にも言及するような数・物に関する言語的枠組を考えることには何の不都合もない。そのような言語的枠組においては、数とは全存在者から成るクラスの特定の下位クラスにすぎない。この枠組においては、数の枠組において「100以上の素数は存在するか」が有意味に問われうるのと同様に、「数なるものは存在するか」は有意味に問われうる。したがって、内的／外的の区別をはっきりとつけることはできない。

クワインのこうした批判からカルナップを擁護するにあたって、本発表では、近年のカルナップ再評価の文脈に位置づけられる議論を参照しながら、メタ形而上学においてESOが提出する描像がいかなるものかを論じ、その描像のプラグマティックな性格を強調する。そして、そのようなカルナップ解釈に基づいて、「内的／外的の区別は可能か」という対立点は、カルナップとクワインの対立において表層的なものにすぎないと主張する。最後に、ESOのメタ形而上学的立場と、「カルナップの見解」におけるクワインの議論の背景にある立場を比較し、カルナップの立場には独自の利点があることを確認して、ESOの議論はクワインの批判によって直ちに棄却されるようなものではないと結論づける。